

た。その間、北方より避難者や疎開者が一時宿をとやめてきて、一時は、三十数人も寄宿し、農場の残り農産物を食べ、また南下した。疎開するよう民団をすすめられたが、農場を離れなかったのがさいわいした。その間、八路军とソ連軍によって、元警察官や憲兵、市の有力者が十数人連行され、行方知れず。うち数人は鉄嶺の河原で銃殺され、死体の引取りに涙したことも幾度か。私もまた保安隊に農地の地権書や拳銃、日本刀を持って出頭せよと呼び出され、きびしく尋問のときには生きた気はなかったが、幸い使用満人の助言釈明があつて、ようやく解散されて助かった。また引揚げ直前になって、農業技術者として指導のため残留するようにといわれたが、引揚げの責任者であり、病人も数人いるし郷里の老父母に一度会わせてくれて懇願し、了解してくれ、ようやく引揚げの時間に間に合つて冷や汗が止まったことなど今なお悪夢のような感がする。

またマラリア、チフス等の病気で死亡した不幸の人は数知れず。翌年六月内地に引揚げることになり、現金一人二千円と所持品の僅かをリュックに背負い、病身の子

どもや女性を介抱しながらコロ島經由郷里に引揚げることができたが、弟の子ども（四歳）と姪が道中で死亡、道路の近くに埋葬した。郷里に帰つて一週間目に甥と甥の子ども三歳が死亡。

### 三十八度線川渡りの脱出

北海道 佐々木 春人

昭和十年五月帯広の自動車会社を退職して同僚とともに渡満し、大連の自動車会社に入社した。新京・吉林と転動し、昭和十二年五月退社して、吉林市内にて自動車修理工場を開設し、ここで妻帯し三人の子に恵まれ、順調に営業し幸せな生活をしていたとき、再度の臨時召集を受けた。それまで教育召集で一か月、第二次ノモンハン事変で一か月半、三回目が八月一日入隊は新京自動車第一連隊で十五日で終つた。軍隊は厳しいというより恐ろしい所だった。終戦になってほつとした。吉林にいたとき、近所の満州人古老は皇軍と言われたのは日露戦

争のときの軍隊で後はと言わなかった。時代とともに質が低下していた。

八月三十日

私等は咸興より南の富坪というところの収容所へ送られるので、咸興駅吹抜倉庫無いで貨車に食料品を積み込んでいたとき、蒼白い顔をした婦人が乳飲み子を背負って、私等が作業していた土場に落ちていた米粒を拾わせて下さいという。数人で作業をしていた土場だから軍靴で踏みつぶされ米粒は土の中に入ってしまい、土の中から米粒を拾うという状態だった。

事情を聞いたら、ソ満鮮の境に住んでいたが、ソ連軍の侵入で急いで三人の子供を連れてここの咸興まで逃げて来たが金はなく売れる物もない。子供達に何か食べさせたいが何もない。今日で三日もただ水ばかり飲ませていました。と涙ながらの話でした。

婦人は背の子は何もいわないが泣く力もないと思いません。上の子にカーチャン何かないのと言われると身を切られる思いです。この米を拾って粥にして食べさせた、といわれた時は私も一緒に泣いていた。

私には吉林に妻と三人の男の子を残している。私は軍隊という殻の中で三度三度の食事で不足はなかった。一般の人々がこんなに苦しんでいることは知らなかった。私等は動物園の動物と同じだった。

この婦人に何か食べ物をやりたいと思った。私には今朝飯ごう一パイ飯があったから、新聞紙にお菜も一緒に包んでやったが、この後のことを思うとき、この吹抜倉庫にはたくさん食料があったから班長にこの婦人の困却振りを話したら、班長は何でもやれと言うので、丁度リヤカーが放置されていたので、このリヤカーに米・味噌・醬油を積んだとき私等の出発の合図が鳴ったので婦人に「頑張って」と言って貨車に飛び乗った。貨車の中であれだけ弱っている婦人はたくさん積んで無事にキャンプまで行けたろうか、あの時は入れる物はない、包む物もない、少しづつ小分けも出来ない。私に少しの金があったのに気づかず、助けることが出来なかった。悔いている。

八月三十一日、富坪の山中に私等のキャンプ村が出来た。

九月二日、元山の海軍兵が数千人来た。一ツ谷を越えた所にキャンプ場を作った。翌日だったか私等のキャンプ場から約三十メートルの地点に直径六メートルくらいの円に杭が打たれた。

ソ連軍より十センチ以上の刃物は全部提出せよと達しがあつて集められた。日本刀などはこの杭の中に無造作に投げ込まれた。召集のとき兵器がなく武器を携行したため家宝のものもあつた。忽ち刃物の山が出来た。歩哨のソ連兵はこの周囲を巡回して退屈になると鞆の綺麗なものを取り出して見ては鞆に納めず、そのまま刀の山にバラバラに投げ込んだ。そのとき雨がショボショボ降つていた。あの刀の山には千振り以上あつたと思う。

九月四日、清津方面より病人、老幼、婦女子が三百人ほどこのキャンプにくるのでキャンプ場を作って迎えた。翌日雨が上がつた。

このキャンプ村で部隊対抗の演芸会の開催となつた。このとき子供たちの遊戯もあつた。子供達はどんな苦勞にも負けず元氣一ぱい舞台を飛び廻つた。

山の中腹に火葬場があつて堪えず青白い煙が上がつて

いる。

九月七日、各班に野菜の種子が配られた。少しでも野菜不足を補うという。このときまで班長は一人も勝手な行動を取らぬようにといひ、ソ連兵はヤポンスキ舞鶴というのを信じてそのときを待っていた。脱走者と分かる朝鮮人が密告すれば賞金が出るとも聞いた。ソ連兵に捕らえられると銃殺とも聞いていた。野菜の種子が配られたから長くなる。九月に入つたばかり朝晩の寒さが身に感ずる。こんな天幕では北鮮の冬は越せない。

九月八日、遂に脱出した。地図はない地理も分からない。京城へ京城へと南へ向かつて進むが安全に行けるのは山だ。

大きな川に当たり橋はない。衣類を脱いで首に巻いて川の中は入つて行く。中ほどで胸まではいつたが段々浅くなってやつと岸に着き、そのまま樹の茂みに入り体を拭いたが、どこまでもソ連兵のマンドリン銃が向いていようで背中がゾクゾクした。

九月十八日、伊川保安隊で金子さんという方の取り調べを受けたとき、所持金がなかった。金子さんは日本紙

幣で五十円くれた。この方は日本大学在学中で夏休みで帰っていた。東京へ行きたいと言っていた。帰りに大豆とトーキビを乾燥したのをくれた。これを嚙んで水を飲むから歩くと腹の中からゴボンゴボンと聞こえた。

九月二十一日、夕暮れに空銃を持った人と出会った。京城へ行く道を聞いたら、今日は遅いから私の家に泊まって明朝早く行けば昼頃までに京城に着く。この辺は危険はない昨日ソ連兵が帰った。この家で夕食の際主人も一緒だった。食事中の話ではここが三十八度線近くという。今までもどこも分からず歩いて来た。明日京城へと思ったら、その道順を何回も聞き返し頭の中に焼き付かせて床に入ったが、なかなか眠られなかった。翌朝早く起きた。この家の主人の従兄弟が買い物に行くので途中で一緒に後について行く。

九月二十三日、無事に京城に着くことが出来た。この家の主人は早稲田大学を卒業し就職が決まったので一寸実家に帰ったときで東京へ戻ると言っていた。この脱出を振り返って九月八日から九月二十三日まで殆ど水ばかり飲んで逃げ歩いた。人家から離れた農家の人は泊めて

もくれたし食べさせてもくれた。途中反日派の人に捕らえられ、親日派の人に釈放されて来たこともあった。あの威風で乳飲み子を背負った米粒拾いの婦人の困却の姿、九月四日清津方面より約三百人の難民等の苦難の姿を思い出す。皆んな女性が頑張っていた。母は強し。大勢の子供達や老人が帰れたのも女性の力であった。

この記録に苦勞した女性の声を多く載せて後世に残して下さい。

## 満州国の日本人避難民救出について

北海道 湯沢 昌志

昭和二十一年六月十日、通河県、方直県方面に難民が数百人居住しているとの情報が日本人ハルビン居留民会にはいつて参りましたので幹部が集まり協議の結果、現地にいたことのある人が一番良いのではないかということになり私と満拓公社通河出張所に務めておりました八木照義さんの二人に白羽の矢が立ち、難民救出のため北